生協（パルシステム）における
飼料用米利用畜産物の供給活動

㈱パル・ミート　江川　淳

パルシステムとは？（組織概要）

パルシステム生活協同組合連合会

設立　　:1990年2月9日
会員数:13会員
会員生協総事業高:2,219.9億円
（2016年度）

ブランドキャラクター
こんせんくん

パルシステムとは？（商品供給事業）

コトコト

食べ盛りの子どもがいるくらしに。

あると便利な定番食材や、
徳用規格が充実。

毎週カタログが届く
宅配サービス

くらしに合わせて選べる
メインカタログが2種類

きなり

おとなだけのくらしに。

少人数家族に適した少量規格や、
こだわり食材を掲載。

さらに4つのオプション
カタログでくらしの課題
解決をサポートします。

パルシステムとは？（理念・ビジョン）

パルシステムの産直とは？（産直の目的）

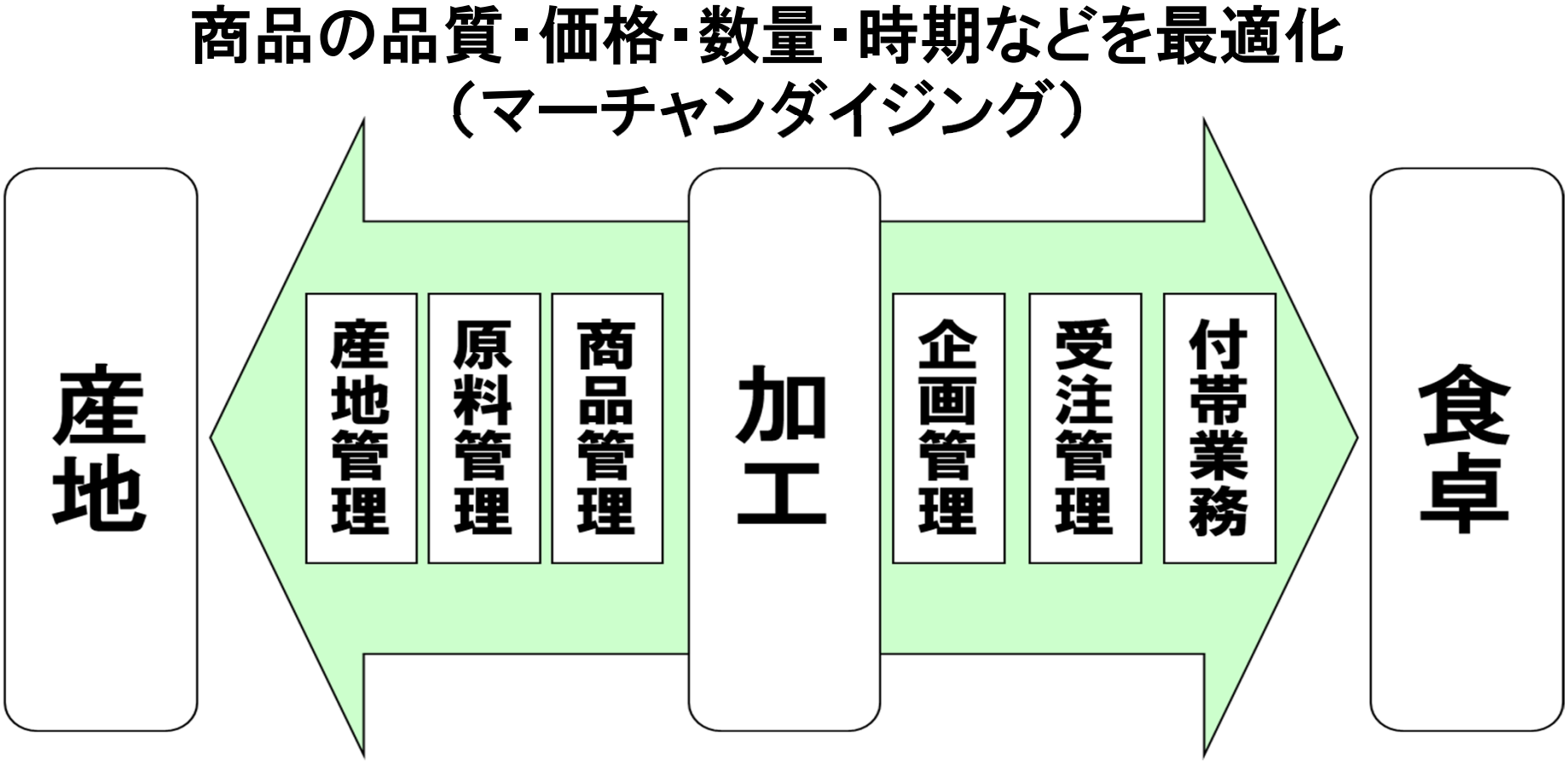
パルシステムの産直は、生活者（消費者・生産者を包含する）の健康で安心なくらしに貢献するため、農業の持つ多様な価値を見直し、環境保全・資源循環を基本におき、**農と食をつないで、豊かな地域社会をつくること**を目的とします。

パルシステムグループ 2020年ビジョン

テーマ　食と農を基本に協同の地域づくり

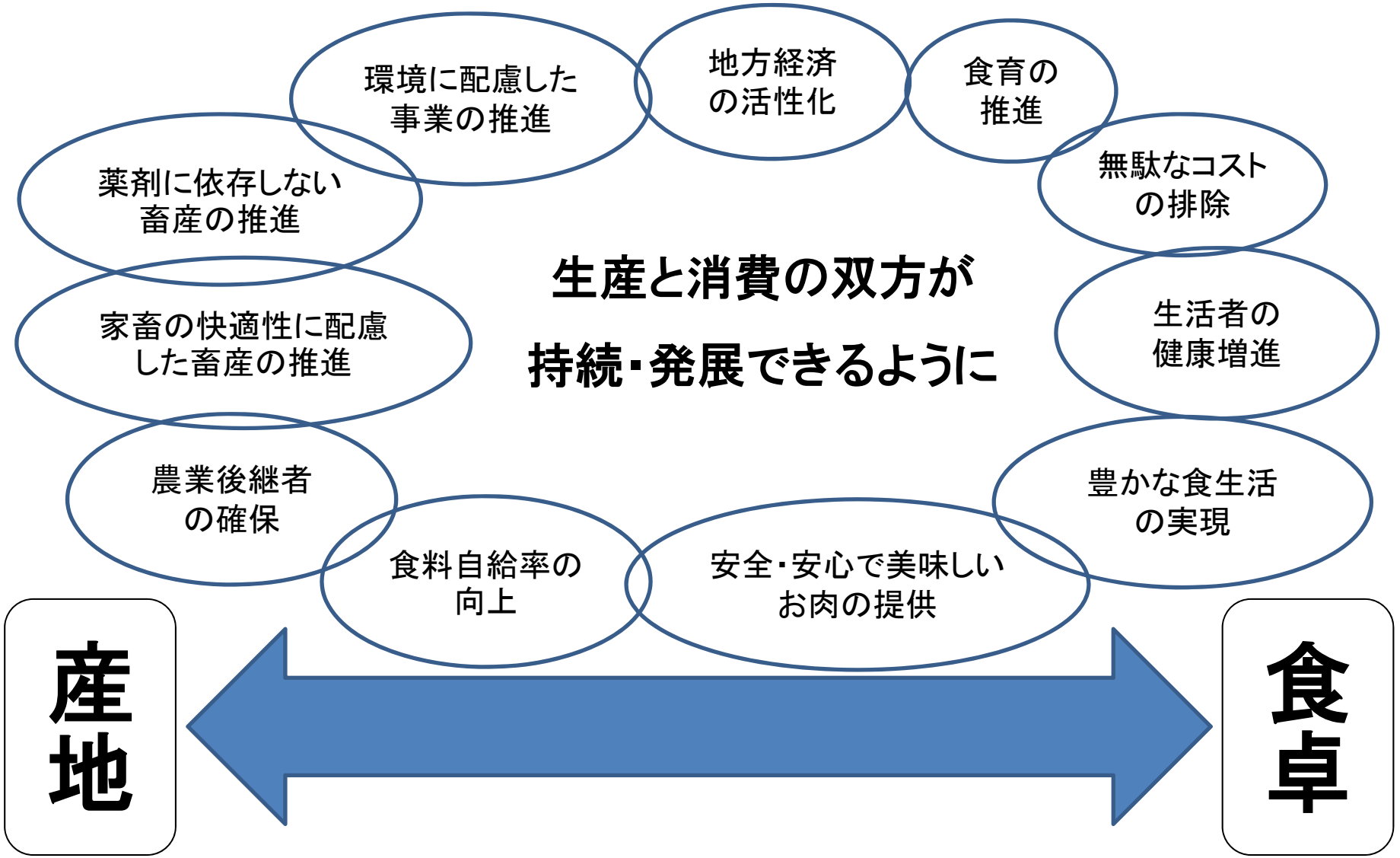
パルシステムの畜産産直（㈱パル・ミート）

㈱パル・ミートはパルシステム生活協同組合連合会が100%出資して設立した食肉専門会社です。産直産地を中心に国産肉だけを取り扱っています。

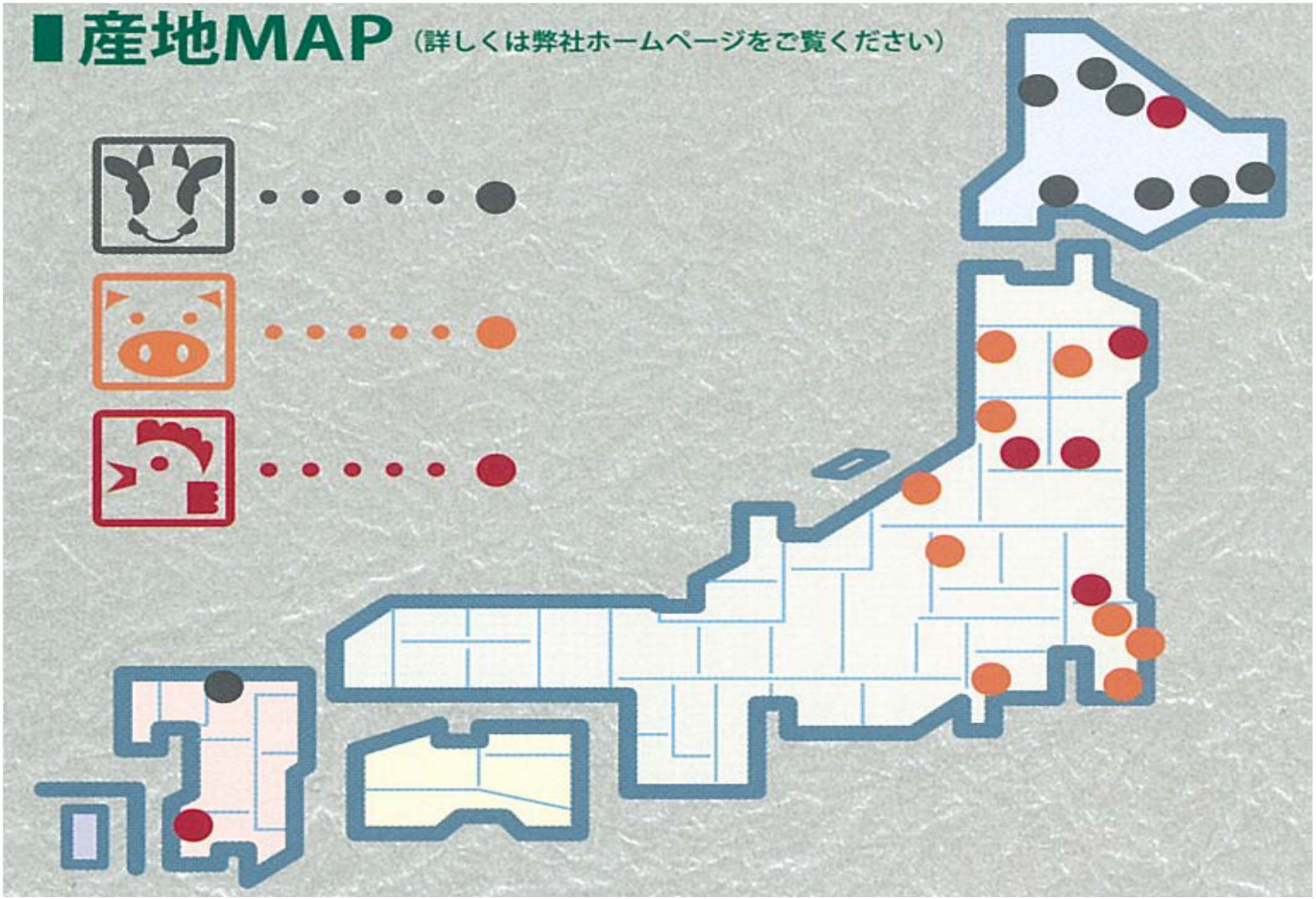


パルシステムの畜産産直（㈱パル・ミートの役割と機能）

産地と食卓を繋ぐことを通じて様々な課題解決に取り組みます。



パルシステムの畜産産直（産直産地）



パルシステムの畜産産直（日本型畜産）

パルシステムの畜産産直（飼料用米の使用量）

パルシステム産直産地で使用される飼料米重量

（2016年度　実績＋推計値）

	年間使用量（トン/年）	パル向け換算（トン/年）
牛肉産地	800	240
豚肉産地	7,346	3,120
鶏肉産地	4,439	1,358
牛乳産地	（調査中）	（調査中）
鶏卵産地	（調査中）	（調査中）
合計	12,585	4,718

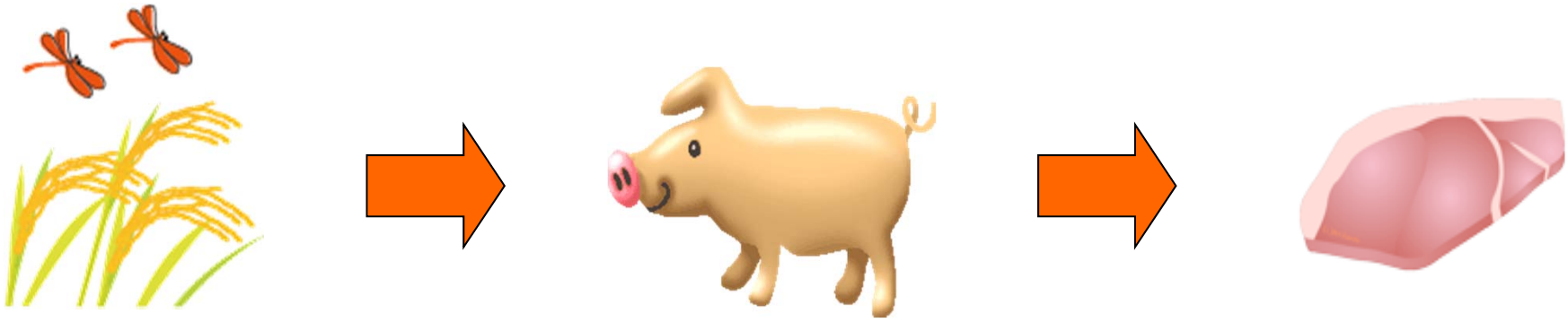
パルシステム産直産地（牛・豚・鶏）で約12,585トン／年を使用
（国内生産量の約3%に相当）

事例1「日本のこめ豚」（商品定義）

豚は生後約180日で出荷されます。

「日本のこめ豚」は、肥育仕上期（約75日）の飼料に、
国産飼料米30%を配合して育てた豚です。
（豚1頭が平均約63kgの米を食べる計算です。）

※産直産地ポークランドグループ（秋田県）で生産



飼料米は配合飼料（原材料の一部として使用）に加工された後に
使用されます。

事例1「日本のこめ豚」（資源循環）

屋内放牧型
バイオベッド豚舎
（籾殻等を使った発酵床）

事例1「日本のこめ豚」（開発の経過）

①2006年10月に行われた「資源循環型農業の取り組みを検討する会」（岩手県二戸市）において、㈱パル・ミートが「飼料米を使った畜産物の取り組み」を提案。

②2007年に「JA北いわて」（軽米町）5.07haと「JAかづの」6.16haにおいて飼料米を作付けを行い、約58トンの飼料米を収穫。（この年の飼料米への補助金は反あたり4万円程度）

③ポークランドグループ（秋田県）で仕上期（約75日）に飼料米10%を配合した「日本のこめ豚」約2,800頭を生産・出荷。

④2008年2月より、パルシステムでは「日本のこめ豚」の供給を開始。

⑤2015年7月27日（給餌段階）から「日本のこめ豚」の飼料米配合比率を10%から30%に拡大。

※2016年度における「日本のこめ豚」の年間取引頭数は約3万頭

事例1「日本のこめ豚」（開発時に決めたこと）

１、味で差別化をしないこと

「お米を食べた豚」だから美味しいのではなく、「産直豚」そのものが美味しい豚肉であること。

２、利用しやすい価格・商品設計であること

より多くの組合員に参加（購入）してもらえる、課題解決のための運動型商品とすること。

３、生産持続できる方法を追求すること

飼料米に対する政府補助金がなくなっても、生産が持続できるように挑戦を続けること。

食をめぐる問題と正しく向き合うことを商品開発時に決めました。

事例1「日本のこめ豚」（商品例）

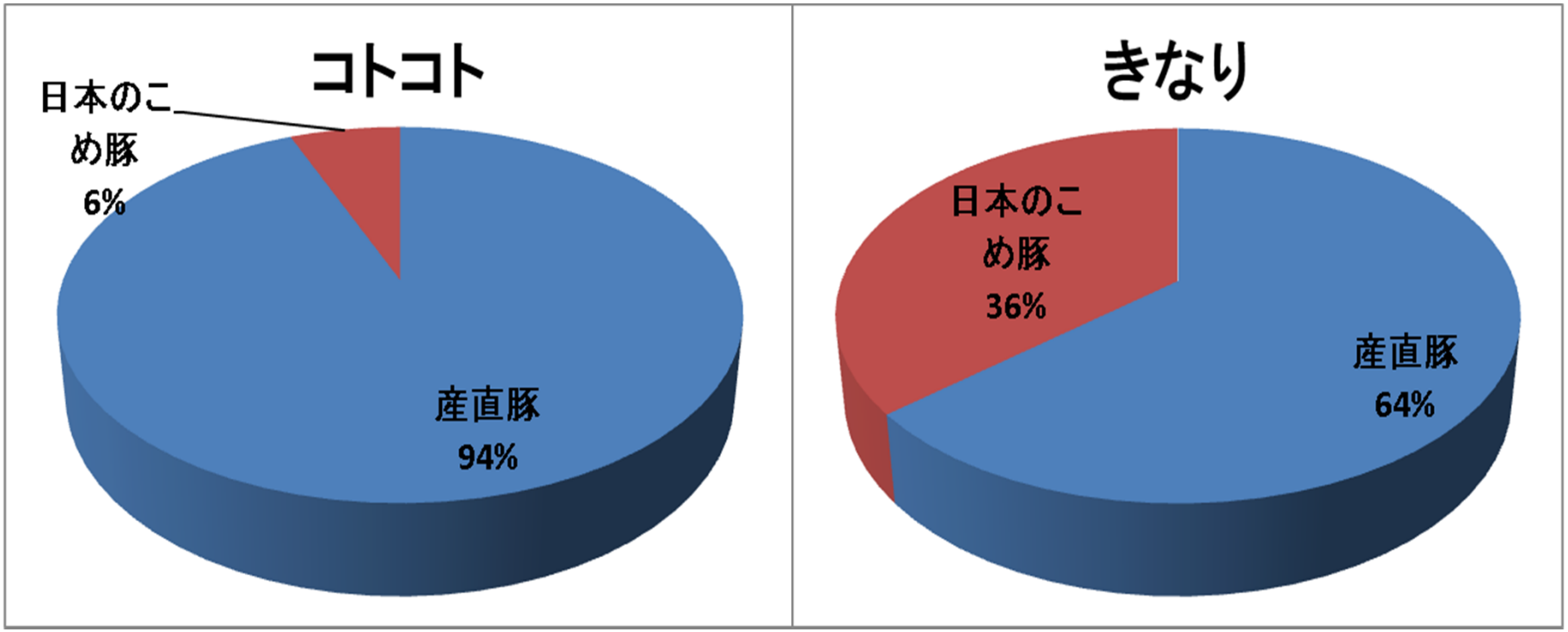
	産直豚 ローススライス	日本のこめ豚 ローススライス
本体価格・量目	399円/170g	388円/160g
ユニットプライス	235円/100g当り	243円/100g当り

「日本のこめ豚ローススライス」は「産直豚ローススライス」と比較して、100g当り8円高い価格設定（約3.3%高い）

事例1「日本のこめ豚」（供給実績）

冷蔵の産直豚肉に占める「日本のこめ豚」の供給比率

※2016年度（2月末）までの累計実績



「日本のこめ豚」は、きなり媒体での供給比率が高い

（コトコト媒体では、まだまだ拡大の余地がある。）

事例1「日本のこめ豚」（東日本大震災）

（ポークランドグループ　豊下勝彦さん）

震災後に飼料がストップしたことで、危機的な状況に陥りました。しかし、「日本のこめ豚」に使う予定だった飼料米を備蓄していたおかげで、これを切り崩して与えることで、豚のいのちをつなぐことができました。**飼料米の取り組みがなければ3分の2の豚は死んだかもしれません。**健康な豚の飼育を目的に取り入れていたバイオベッドも、豚が強く育ち、立ち直りが早いという効果がありました。辛い思いをしましたが、**震災を通じて「今までやってきたことが正しかった」という確証を得ることができました。**

飼料米

豊下代表

事例2「までっこ鶏」(「までっこ鶏」とは？)

「までに」とは、岩手県北地方の方言で「丹念に」「丁寧に」の意味です。手間ひま掛けて、大切に育てた鶏、それが「までっこ鶏」です。

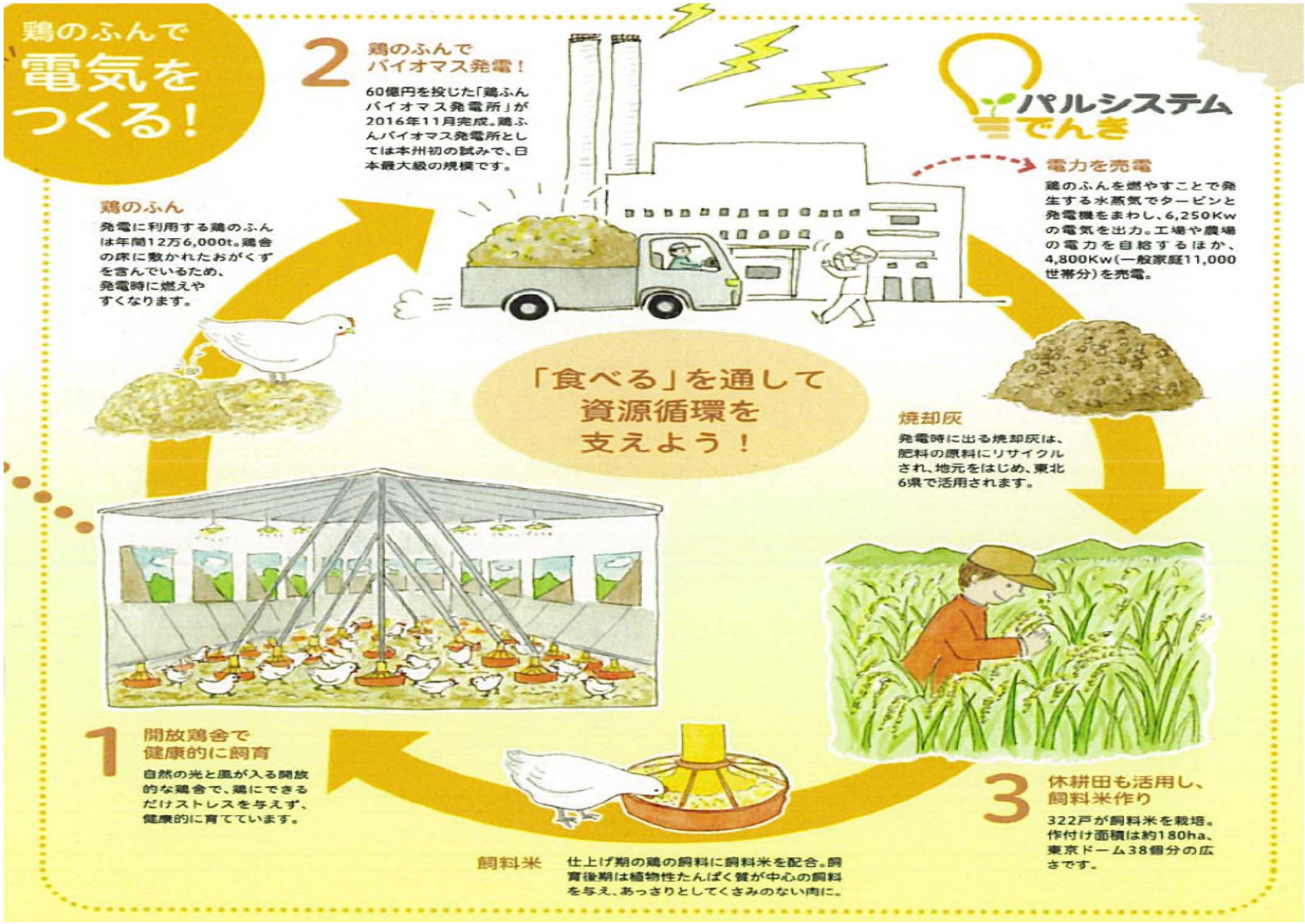
＜生産の特徴＞
◆飼料に抗生物質・合成抗菌剤を不使用
◆後期・仕上飼料は動物性たん白質を不使用
◆自然の光と風が入る自然換気型の鶏舎

㈱十文字チキンカンパニーの生産農場のうち、45農場が「までっこ鶏」の生産指定農場となっています。
（年間約150万羽がパルシステム向けに出荷されています。）

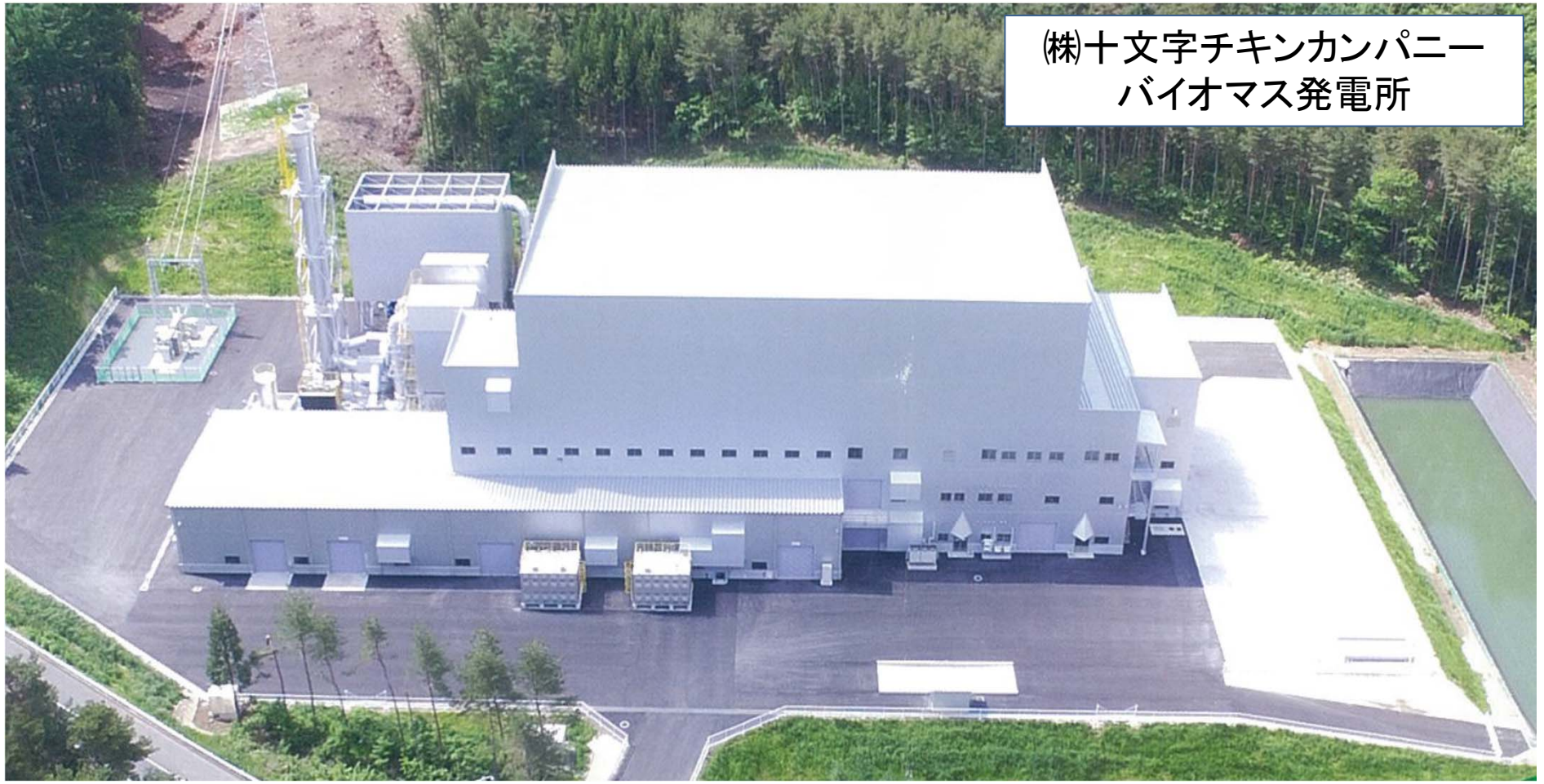
事例2「までっこ鶏」（飼料米の使用量）

㈱十文字チキンカンパニーでは、2009年から飼料米の使用を開始し、2016年には飼料米約3,700トンの使用を見込んでいます。（パルシステム以外に出荷する鶏を含む）

事例2「までっこ鶏」（資源循環）



事例2「までっこ鶏」（電気の産直取引）



1日約400トンの鶏糞を燃焼して得られる電力6,250kwのうち、十文字チキンカンパニーの自家消費分を除く全量4,800kw（約1万世帯が使用する電力に相当）を㈱パルシステム電力が購入。
2016年11月3日より、パルシステム組合員向けの電力供給を開始。

事例3 その他産地

←すすき牧場

（福岡県）

↓山形コープ豚

（山形県）

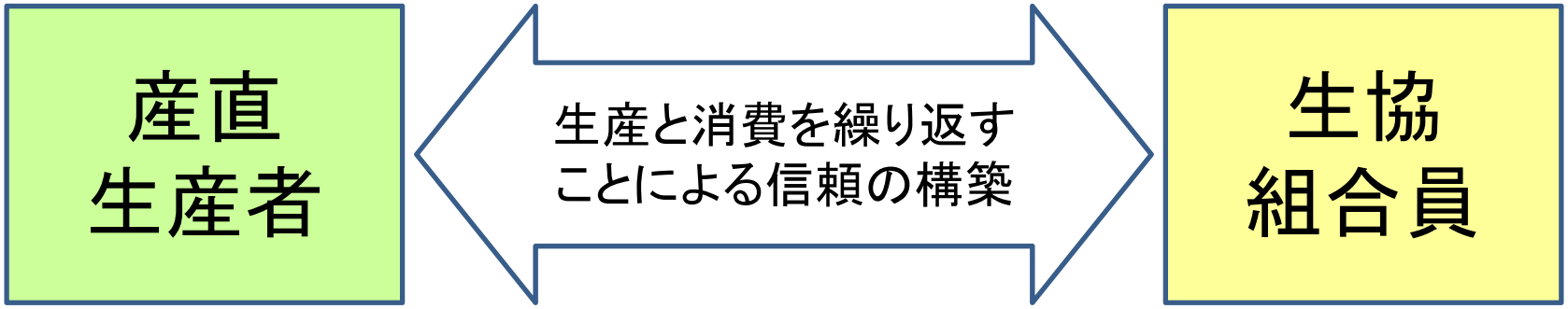
畜産生産者が牧場内に
飼料製造設備を設置

（保管・粉砕・混合）

コスト・品質・鮮度を追求

生協における飼料米活用の可能性

生協の産直事業における**「特定の生産者が作った生産物を、特定の消費者が食べ続ける」**という仕組みの中で、これまで以上に飼料米活用を拡大できる可能性があります。



生協 組合員	生産者の取り組みに共感している。 品質と価格にも納得している。 消費選択により生産者の応援がしたい。
産直 生産者	消費が安定しているので生産が継続できる。 必要な設備投資がしやすい。 消費者の生の声が聞けて励みになる。